

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

（領域ごと）

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ②我が国の言語文化に関する事項 | やや課題が残る結果であった |
| ③A話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ④B書くこと | やや課題が残る結果であった |
| ⑤C読むこと | 概ね良好な結果であった |

（問題形式）

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

（無解答率）

概ね良好な結果であった

（その他）

- ・もっとも正答率の高かった設問 必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉える問題
- ・もっとも正答率の低かった設問 文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見つける問題
- ・もっとも無解答率の高かった設問 もっとも正答率の低かった設問と同じ
- ・もっとも無解答率の低かった設問 登場人物の相互関係について、描写を基に捉える問題 等

分析

領域別に分析すると、全国平均や大阪府平均と比較して、概ね同じ水準であった。しかし、問題別に分析すると、最後の5問については無解答率が非常に高い。時間配分に課題があり、最後の問題まで解答しきれなかった児童が多かったと考えられる。

無解答率が非常に高かった一方で、問題の正答率は平均的であったことから、時間の調整ができた場合は、全国・大阪府と比べても、正答の割合が高かったことがわかる。また、漢字に書き直す問題の無解答率が他に比べて高いことから、漢字の習熟に課題が見られた。

以上のことから、問題への向き合い方や取り組む姿勢を日頃から意識したり、自信がないことにもあきらめずチャレンジする力を育てることで無解答率が下がり、正答率が向上するのではないかと考える。

またほかの領域に比べて、「書くこと」「記述式」の問題は、全国・大阪平均よりも低い結果だったため、今後は「自分で考えて書く」活動を学校としてこれまで以上に取り入れていく必要があると考える。

〇●算数●〇

(領域ごと)

- | | |
|----------|---------------|
| ①A数と計算 | 概ね良好な結果であった |
| ②B図形 | 概ね良好な結果であった |
| ③C変化と関係 | やや課題が残る結果であった |
| ④Dデータの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | やや課題が残る結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もっとも正答率の高かった設問 被乗数に空位のある整数の乗法の計算
- ・もっとも正答率の低かった設問 果汁が含まれている飲み物の量を半分にしたときの、果汁の割合について正しいものを選ぶ問題
- ・もっとも無解答率の高かった設問 示された場面を解釈し、除法で求めることができる理由を記述する問題
- ・もっとも無解答率の低かった設問 表の意味を理解し、全体と部分の関係に着目して、ある項目に当たる数を求める問題 等

分析

基礎的な計算の正答率が高い。一方で、様々な思考・判断を要する問題については課題がある。基礎的な計算ができるのは、5年時に毎日計算プリントに取り組んで練習をしてきた成果と思われる。

割合に関する問題の正答率が低い。変化と関係に関する領域は全国平均と比べてやや低い数値で、「やや課題が残る結果であった」に近い。授業の中で、日常における数量の関係に着目したり、比較量と基準量から割合を求めたりする機会を定期的に入れていく必要がある。

図形では、図形の構成について考察し、記述する問題の正答率が低かった。記述式の問題形式は全国平均と比べてみてもやや低い結果となった。この問題だけでなく、記述式で答える問題について、正答率が低くなることから、問われていることを正確に読み取り、必要な事柄を適切な言葉を使って説明することに課題がある。

(領域ごと)

- | | |
|---------|---------------|
| ① エネルギー | 概ね良好な結果であった |
| ② 粒子 | やや課題が残る結果であった |
| ③ 生命 | 概ね良好な結果であった |
| ④ 地球 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|---------------|
| ① 選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ② 短答式 | やや課題が残る結果であった |
| ③ 記述式 | やや課題が残る結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・ もっとも正答率の高かった設問 観察を基に自分の考えを記述する問題
- ・ もっとも正答率の低かった設問 実験で得た結果を、問題の視点で分析解釈する問題
- ・ もっとも無解答率の高かった設問 実験で得た結果を、問題の視点で分析解釈する問題
- ・ もっとも無解答率の低かった設問 昆虫のからだのつくりの問題 等

分析

正答率は、粒子の分野にやや課題が残る結果であった。記述式の問題で、自分の考えをもち、記述する問題の正答率・無解答率がほかの問題に比べて課題がある。

一方で、生命・地球の分野は、無解答率が低く、正答率は大阪府・全国をともに上回っているものもあり、実体験との結びつきが大きい分野では正答率が高い。

問題形式としては、全国に比べて、短答式・記述式の問題に対してやや課題が残る結果であった。正答の条件が決まっている記述式の問題で、解答の表現方法が十分でなかったことが考えられるが、実験の内容について解釈し、自分の考えを記述する問題の正答率が低いことから、理科の実験の際、実験方法、実験の結果については理解しているものの、そこから問題の視点で分析して実験を解釈し、根拠をもって自分の考えを持つことに課題があると考えられる。

理科の学習の際、実験器具の名称や実験結果の数値などを用いて、実験の問題と結果について、根拠をもって自分の考えを説明する力をつけていくことが、正答率の向上につながると考えられる。また、実験の結果が日常生活の場面と結びついていることを児童が実感することができると、より学習の意欲の高まりが期待できる。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

正答率は、国語の書くことや理科、算数の記述式でやや課題が残る結果となっている。

各教科とも選択式、短答式の問題については概ね良好な結果であった。

問題に対して前向きに取り組めてはいるが、自分の考えを書くことには苦手意識があることも読み取れる。解答がわかっているにもかかわらず条件を満たして記述する力を育成していく必要がある。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

学力高位層はこの数年、全国平均を下回る傾向が続いている。一方で、学力低位層およびエンパワー層は全国平均を上回る傾向が続いている。

無解答の影響もあると思われるが、学力低位層が増える傾向にある。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

本校では、共に学び共に育つ集団作りを目指して学習でも子ども主体の授業づくりを進めている。自分で見通しを立て、自力解決をし、考えを発表し交流することで考えを広め、深められるように「問題解決学習」にも取り組んでいる。算数の学習を中心に「問題解決学習」を展開することで見通しを立て、自力解決をし、考えを発表し交流することで考えを広め、深めてきた。また習熟度別授業、放課後寺子屋学習など少人数での学習により「分かる授業・指導」「苦手意識をなくす」ことを重視してきた。スクールサポーターの活用も個に応じた指導に役立っている。算数と国語で「東小スタンダード」を作成し教員間で共有して一貫した指導ができるように努めている。算数の「東小スタンダード」は子どもたちにも配布をして授業の流れやノート作りに担任や学年が変わってもスムーズに対応できるようにしている。

一昨年度より、子ども達の「読む力」を養うために「読み取り書きまとめる力を育てる」をテーマに国語の研究に取り組んでいる。読み取る力に個人差があるので、学習を進める際にはコロナ感染防止に努めながら工夫をしてペア学習や、少人数のグループ学習で交流し学習を進めている。自分の考えや内容をまとめることを苦手としている児童もいるため、要約する練習や短文づくりにも取り組んでいる。子ども達の語彙を増やすために国語辞典を活用したり、視写の取り組みを行うなど子ども達の成長過程に合わせながら取り組みを行っている。また、国語科に限らず授業の中で、ペア学習、少人数のグループ学習を活動に入れ、自分の考えを「相手に伝える力」つまりコミュニケーション能力を身につけることへの手立てを行っている。

また、「家庭学習週間」を設定し、宿題のチェックや自主学習の習慣化をめあてに家庭と学校で連携をはかっている。「家庭学習のてびき」をそれぞれの学年に合わせて配布し自主学習の用例（漢字練習や計算の反復練習、意味調べ、調べ学習、読書など）を提示することで、学年に応じて宿題だけでなく自主的に学ぶ自主学習も行っているように働きかけている。

本校の児童は家庭での自由時間をインターネットの閲覧やゲームなどに費やす傾向があり、読書が好きな児童もいるが、読書をする機会が減少している傾向にある。幅広く色々な本や情報に興味を持てるように、また、読書が好きな児童が増えるようにいろいろな取り組みを行っている。例えば、毎週読書タイムを設定し、図書委員を中心に読書をする時間を設定したり、地域よりキッズサポーターに協力をしてもらい、読書タイムを使って絵本などの読み聞かせを行ってもらったりしている。その成果もあって毎週の読書タイムを楽しみにしている児童は多い。読書週間には「おすすめの本」の紹介を全校児童で作成したり、図書委員会によるスタンプラリーなどの読書への興味関心を高めるような働きかけや各クラスに学級文庫を設置するなどして興味や関心が広がるような働きかけを行ったりしている。